広島工業大学紀要研究編
第43巻（2009）pp.435-442
翻　　訳

ある旅の伝説（1）

オイゲン・ゴットロープ・ヴィンクラー著
松川　弘*・訳

（平成20年9月11日受理）

Legenden einer Reise (1)

von
Eugen Gottlob Winkler

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

（Received Sep. 11, 2008）

ムラーノ[1]を過ぎて少ししてから，船長は，船の屋根の上にのぼることをわれわれに許可した。そこから，われわれは，あらゆる方向に自由な展望を楽しむことができた。潟を横切った小汽船は，もう島々に近づいていた。まもなく，われわれは，島の間を曲がりくねって通る狭い運河の一つに入った。ゆらめく姿を水面に映す庭や家々を載せて，島々は，巨大な筏のように，われわれのそばを通り過ぎていった。

われわれは，ブラーノ[2]を離れた。北から南へ向かうにつれて，ブラーノは次第に小さくなっていった。真ん中から傾いた教会の尖塔の帆柱が突き出た古い家並みの重みに，ブラーノが次第に沈んでいく様子を，われわれが振り返って眺めている間に，船は，新たな島に近づいていた。唯一の乗客であるわれわれは，停止した船の屋根から這い出て，静かな人気のない岸に通じているグラグラする道板を渡った。そこには葡萄畑が広がっていた。片方の岸に小道が通じている狭い運河が，内陸に伸びていた。しかし，ここでもわれわれは，旅行者であることを見破られる運命にあった。

「道は暑うて，ほこりっぽいし，長ごおますで」と，誰かが，ドイツ語でわれわれに呼びかけた。その声は，奇妙に変化して，呑み込みの早いオウムの声のように響いた。それは，向こう岸の暗い茂みに小舟を隠している水夫で，こちらに漕ぎ寄せてきて，その舟でわれわれをトルチェッロ[3]に運んでやろうと申し出た。彼は，イタリア語で，運賃のことを話し始めた。われわれが何も返答しないのに，彼は行動を開始し，長ったらしい，活気に満ちた話を展開したが，その途中で，自分の要求金額を半分にした。そして，ようやくわれわれの発言を許したとき，彼の小舟を使うことにわれわれがなかなか同意しないのを知って，彼は少なからず驚いたのであった。だが，天候は秋らしく穏やかで，決して暑くはなかったし，われわれが見渡した限りでは，道もほこりっぽくはなく，距離的にも大したことはなかった。目立ったところはどこにもない一本道だった。この道は，黒く動きのない水路に添って伸びており，アーティチョークの畑や取り入れで乱雑になった葡萄畑のそばを通って通じていた。一軒の壊れかけた家があらわれた。その家の色褪せた薔薇色の壁の上には，湿っぽい黒雲がたれこめており，アーモンドの木の生えた小さな庭が続いていた。他の地点は，ついうっかり通り過ぎたのだが，ここでは，すべてのものが，それ本来の意味を保っていた。精神は，期待の状態にあるといえるほどには，まだ覚醒もしておらず，鋭敏にもなっていなかった。同時に，期待と直接関係していないすべてのものが，観察者の魂の中に引き下がり姿を消していた。あの時間の特性に思いを致していると，私には，自分が一人っきりで道を歩いているように

* 広島工業大学工学部電気・デジタルシステム工学科

感じられた。色々なことをより厳密に呼び戻す思い出が，浅い付き合いであるとはいえ，友人が同行していることを，私に思い出させてくれた。私は，ジョリンゲルが土手の端に姿を現わすのを，再び見たのだった。私はいささか遅れ，友人たちは先に行ってしまっていた。そのとき，彼女は，突然，私に向かって呼びかけ，悲しげな声を上げながら，ちっぽけな干からびた実しかついていない葡萄の枯れ木を示した。彼女の頭は，丈の高い葡萄の葉の影で覆われていた。彼女の顔は，緑色の薄明の中ではっきりしなかった。周囲と同じように暗い彼女の目は，輝きがなく，うつろだった。そして，頭上に広がる木の葉のトンネルの真ん中から，奇妙なことに，彼女の素手が，青みがかった溶けるような大気の中に突き出ていたのである。その葡萄の枯れ木は，干からびて，黒々と，私の上に傾斜していた。

あの少女は，これから，私に同行するのだろうか？私には，彼女が，野生の蔓に抱擁されてここに留まり，私の期待の視線に触れて葡萄の木と化すという，あの太古の出来事が繰り返されるように思われた。

広場に足を踏み入れたとき，私はひとりだった。運河は，ここで突然終わりになっていた。辺りを見回すと，右手に，二つの教会が認められた。「素晴らしい」という言葉が思わず口を衝いて出たが，それをそのまま信じているわけではなかった。それは，いくつかの写真から得られた，私の頭の中のこれらの建物のイメージが，はるかに美しく，偉大であったからだ。しかし，私はすでに，それが錯覚であったことを悟っており，用心していた。現実に出会って，それを夢の像と比べてみると，現実は，どうしても，誇張された陳腐なイメージの背後に引き下がってしまうものだ。

だから，私は，この二つの建物から急いで目をそらせ，撮影の際にカメラの選択眼が私から隠しておいた事物の上に視線を滑らせた。ここに繁っている木々を目にして，私は，それらがここに生えてくれていることに感謝した。私は，運河に向かって広がっている汚い家々に沿って歩いた。鶏があちこちで歩き回り，誰かが腕白小僧を殴りつけていた。ある家の二階に女絵描きがいた。彼女は，窓辺に立って，向かいにある庭を写生していた。彼女は，斜めに差し込む光に合わせて，画架の位置を変えていたのだが，彼女の絵は，階下からたやすく見ることができた。絵は，もう少しで完成というところだったが，パンツ一丁で巻き煙草をふかせた男友達がそばに立っていて，その絵について専門的な所見を述べていたが，その声は，下の広場でも聞き取れた。

それから私は，笑い声や叫び声に誘われて，小さな居酒屋に入っていった。青二才の若僧が数人で，羽をばたつかせる野生のガチョウを，テーブルの上に載せようとしていた。ガチョウは，力の限り彼らに手向っていた。若僧たちが，ようやくのことでガチョウを落ち着かせ，手を離すたびごとに，生きながらして食卓に載ったこの珍しいガチョウは，ばたばた飛び上がり，逃げようとした。ガチョウの取り乱した不安のしるしが，はっきりした音を立てて，テーブルの上に落ちたとき，若僧たちは，鳥から手を離した。彼らは，笑いながら四散し，ガチョウも，同じように遠方を目指した。そして，ひどく汚れたテーブル掛けがあとに残された。その様子は筆舌に尽くし難く，テーブル掛けが慈悲を求める叫びをあげそうに思われた。確かに，前々から，そのテーブル掛けの色は，きちんとアイロンのかかった洗濯物の白からは，はるかに隔たっていた。単にそれが汚れているということすらためらわれる程だった。長い夏は，その外見に何の痕跡も残すことなしに，テーブル掛けの上を越えていった。無数の客がやってきて，よく葡萄酒をグラスに注ぎ損ない，その度に，テーブル掛けには赤い染みができた。料理が落ちて，汚らしい染みになることもあった。夏の間，このテーブルで食事をとったどの客も，どんなに奇麗好きで用心深い客でさえ，好むと好まざるとにかかわらず，テーブル掛けのグレーの色を徐々に濃くするのに貢献していたのである。

しかし今，この明らかな汚物がその上に載ったので，テーブル掛けの清潔さのこのような些細な侵害は，大して問題にはならなかった。そのような軽い汚れは，すぐにふき取られ，初めから存在していなかったように消え去っていた。だが，このように湿った黒みを帯びた緑色の塊がテーブル掛けの上に載ったのは，これが初めてであった。この塊の回りの部分では，テーブル掛けは，きつい，非常に目障りな白さを示していた。ウェートレスが急いでやってきて，テーブル掛けをひとまとめにした。彼女は悲しそうな声をあげた。彼女が罵り抗議し始めるのを，実のところ期待していたので，私はいささか驚いた。しかし彼女は，同情をそそるように，絶望的に，長いあいだ嘆き悲しむことで甘んじていた。彼女に慰めの言葉をかけてやり，その汚れが実際には彼女が嘆くほどひどくはないことを告げて，彼女を安心させてやる必要を，私は深く感じた。夏は過ぎていたので，これからやってくるわずかな客を迎えるのに十分な数の，白い布で覆われたテーブルが，あちこちに置かれていた。

この少女にそう言って，それで彼女を慰めたと信じていた私は，完全に裏切られた。彼女は，ポカンとして私を見つめていた。私はテーブル掛けを見た。私には，テーブル掛けが訴えているように思われた。少女は，それをまだ畳まずに手に持っていた。最大の汚物が，そこから落ちた。

だが，残った物も相変わらず吐き気を催させた。テーブル掛けの汚れが，全く不当な仕方でつけられたということが，やはり問題だった。それについて，彼女には何の責任もなかった。確かに，テーブル掛けの性質上防ぎようがない通常の汚れについては，彼女は責任を負っていた。料理や葡萄酒の染みでそれが汚れているということなら，（テーブル掛けは，その本質からすれば清潔でなければならないというもっともな願望の発現として）彼女を非難することもできよう。しかし，この場合，テーブル掛けはそれ本来の清潔さが決定的かつ無責任に奪い取られるという仕方で汚されたのである。これは，確かに，嘆き悲しむ絶好の機会であった。

ガチョウは，すでに水の中で駆け回っていた。友人たちは，四散してしまっていた。私は，次第に，この場の状況に慣れてきて，正常な心理状態で，二つの建造物に歩み寄ることができた。

一筋の舗装されていない小道が，広場を横切って，繁茂した草の間を，正面の入口に通じていた。明るい芝地には，余計な代物のように，石の塊が置かれていたが，廃墟のような感じはせず，むしろ，まだ使われていない作業場の原料を思わせた。ざらざらした大理石でできた柱頭や円柱で，完成品もあれば，未完成のものもあった。それに，もっと硬い御影石や斑岩でできた円形の巨大な浴槽が，あちこちに置かれていた。かつて，受洗者たちが，そこに身を浸したのだ。

聖堂の正面入口の前には，地面に埋め込まれるように，かつては洗礼やその他の神聖な洗浄に役立っていた施設の丸い土台が認められた。低い壁に至るまで，すべてが取り壊されていたが，聖堂の入口前に設けられた煉瓦造りの拱廊を覆う屋根の下のところにだけ，古い壁のごく一部が残っていて，内側に，大人の背丈ほどの高さの壁がんをうがてるほどの広さがあった。かつて，そうした小部屋の円環が，丸い空間を取り巻いており，今はなくなっている広い水盤が，その真ん中に置かれていた様を想像すると，それは丁度，その幾つかが今なおポンペイで見られる，ローマ風呂の空間に合致する。古代において，人間の肉体の崇拝に役立っていた施設が，最初のキリスト教徒に受け継がれ，新たな精神に奉仕することになったのだ。かつて輝かしい肉体が跳ね回っていた浴槽の幾つかに，後になって，永遠の幸福を授かるために，憧れに満ちた受洗者たちが入る，貴重な水が湛えられたわけだ。かつて様々な姿態で壁がんの中に立っていたアフロディテ，直立したり，自分の肉体の華麗さと優しく戯れたり，入浴したり，驚いて自分の裸を隠したり，しゃがんだり，自分の頭を果実のような肢体にもたせかけたりしていたアフロディテは，別の用途に使われるようになった部屋から出ていかねばならなかった。しかし，今ここに残された壁がんの空間の優しい風情は，彼女が，今もなお，変身して，人間の肉体の感性に織り込まれているように思わせた。力強く体を上に反らせたその肢体に，私は，難なく彼女の魅力を見出すことができた。背後で壁が優しくくぼんだ空間を取り囲むこの隙間から，彼女は歩み出てきた。人間の形姿の思い出，面影，浮動する類似を，この姿で再検証することほど，心をそそるものはない。線や幾何学的な立体に気化することで，明確なもの，知覚可能な表面の輝きは失われたが，感覚的なものそれ自体は残されている。純粋な形で，それどころか，さらに強められて，その感覚的なものは現われ，いわば精神において，現象のすべての可能性を先取りする。それは，腰を背景から際立たせる線や，空間に突き出された胸の湾曲によって，肉体の快感が喚起されるからではなかろうか？

だが，それは，むき出しの禁欲的な壁がんの中に，まだ完全に保持されている。廃墟を生み出す時代が失望させ，恨みを込めて葬り去った，人間の肉体のすべての美は，死に絶えることなく，この壁がんの中で休み，精神がそれに触れるやいなや目覚め起き上がる気で，ただまどろんでいる…。

この二つの教会の現在の姿は，10／11 世紀のものである。三身廊のバジリカ様式[4]の教会である，サンタ・マリア・アスンタは，魅力的な層状の輪郭を示している。この切り詰めは極上である。広場に面している正面は，恋人の顔のように忘れ難い。幅広く，低い破風。その下には，六つの幅の不揃いな付け柱が巡らされ，少し突き出た張り出し部に支えられて，壁を優しく活気付けている。

裏正面の外観は，さらに特徴的である。通常予期される三つではなく，四つの不揃いで大きな後陣を持つことで，それはまず，われわれを驚かせる。だが，もっと近づいてみると，後陣は五つであることが分かる。それは，翼廊として身廊の端を閉じている最大の後陣が，その足許に，もう一つの，幾つにも区分され，煉瓦で覆われた半円形，この五つの不揃いなグループの内で最小のものを隆起させているからだ。そして，人々は，ここで初めて，北側で中廊と第二の側廊が接合されていて，聖器保管室を含んだ後陣が設けられていることに気づく。しかし，ここで恣意的に築かれ，全く異質であるように見えるものはすべて，実際には，完全な調和を保っているのである。

建材は煉瓦で，金色からオレンジがかった赤までの，歳月を経て風化した色を呈していた。紫がかったワインレッドがたっぷり染み込んだ，くすんだ秋の光のもとで，影は褐色をなしていた。この裏正面は，表正面に比べると幾らか荒れ果てた感じがした。表正面には，木の植わった小さ

な広場が会衆のために設けられ，軽やかな翼のある，アーチで飾られた八角形から皮の張った太鼓と化した，サンタ・フォスカ教会と，建造物によって結合されていた。裏正面は，ひたすら後陣の戯れに身を委ねており，観察者は，もう何もここでは彼を待ち受けていないので，その戯れに同化されてしまうのであった。湿った地面を少し歩き，潟の一部である水たまりを認め，狭い溝を軽く飛び越え始めるようになると，向こうの方に，葡萄畑や野原といった，別種の，異形のものが姿を現わす。後陣のリズムによって，思考とその優雅さが中断される。力強く，測り知れぬ高さで――この貧弱な島では，その地点がどこにあって，そこまでの距離がどれくらいか想像がつかないのだ――塔が高みに伸びている。鐘楼という名や鐘の音に全くそぐわない城のような塔が，孤独に，険しくそそり立って，空や水に映えているのだ。

正面入口が閉まっていたので，私は，脇の入口から聖堂に入らねばならなかった。方向と対象物を求めて，探るようにあちこちさ迷っていた視線は，天井に釘付けになった。破風を形造る骨組み，補強材，空間を突き抜けて一方の壁から他方の壁へと渡された力強い横桁からなる天井が，剥き出しのまま，壁の上方を覆っていた。

ここでは，確かに，建築の過程がはっきり分かった。どの工程も，ここでは，目に見えるものとして残されていた。見ての通り，素晴らしい厚さの壁が築かれたが，その壁を出来る限り丈夫に，堅固なものにするだけの余裕が，人々にはなかったのだ。無数の石が接合されて出来た壁が，空間を区分していった。それでも，あちら側とこちら側では，相変わらず同一の空気が流れていた。それから天井が築かれ始めた。すっかり乾燥した，良質の太古の木，どっしりした丸太がつなぎ合わされ，足場として，石の上に置かれた。煉瓦が一つずつはめ込まれ，無限の真ん中に，尺度と法則に従ったひとつの空間が生じたのである。

この空間を形造るために，木と石がどのように組み合わされているかが，はっきり分かること，忍耐と持続をその本質とするこの絶え間ない工程に，それを窺い知ることが出来ること，そこに，この建物の本来の素晴らしさが起因している。そのどれもが，森や石切り場では，自分のためにだけ存在していたとはいえ，ここでは，このかつてない和合により，木は木として，石は石として，その本質を保証され，表出されているのだ。そして，教会の至る所で，この関係は，極めて効果的に持続している。冷たい石に比べて温かい木の梁が，柱の上に張られた丸天井を補強し，それによって，主身廊が側廊から分離されている。ひび割れた，褐色の梁が，空間全体の上に掛かっていて，内陣のすぐ前には，柵が設けられ，一連の黒い，彫刻を施した石盤が，愛らしい小さな柱で支えられている。

正面や背面からではなく，偶然，脇の入口から入り込んだために，周囲の空間は，なおも私を混乱させていた。確かに，私は，両端から，その大きさを予感していた。黄金色の微光が，私の目を撃った。それが現前していることは分かっていたが，いい加減な気持でそれとかかわり合う勇気は，私にはなかった。差し当たり，私は，視界を遮っている，この立派な柵の前に立ちつくした。彫像の載った小さな柱が，花梗のように膨らんで，石盤の間に突き出ていた。ただ，私はそれをほとんど見ることができず，呪縛されたように感じていた。

それは，ずっと以前に，人間の手で生み出されたものである。しかし，私は，それが，現存するものの内で最も美しいものであると，はっきり断言できる。これは，一体どういうことなのだろうか？

過剰なものはない。声高なもの，巨大なもの，その量で目や精神を圧倒するようなものは，何ひとつない。正方形の大理石の石盤に，初期ロマネスクの薄肉彫りが施されているのだ。象牙色の，細かく砕かれた石は，穏やかに古びていた。作者の崇高な感情が伝わってくる。そこには，線の音楽が渦巻いており，装飾の枠組みの中で，文様の戯れが生じ，それは，色々な文様で，強くなったり弱くなったりしながら現われている。

これがすべてである。悟性はそれを決して完全には理解しないであろう。しかし，抽象的なものの戯れに含まれた力の痕跡に，かつて触れたことのある者は，もはや立ち去ることはできず，「私は，今や，すべてを見，即座に，この彫刻の真価を悟った。それらはもはや，私に，これ以上何も教えてはくれない」と言うに違いない。それは，この彫刻が推測を許さず，世にも稀な無尽蔵の豊かさを内に秘めているからだ。その各部分の調和は，時の緩慢とともに変化するように思われる。時の進行をゆるやかに引き延ばす生が，抽象的な形姿の中で脈打っており，その成長や変化，秩序は，決して妨げられることがない。私は，その石盤を，六，七度，長い間，数分間，結局は何時間も眺めた。繰り返し，私はそこに立ち戻った。そのために，私は，なおも度々，トルチェッロへの小旅行を企てたほどだ。そして，いつも，それらは，私の眼には別様に見えた。だが，その秩序は，決してかき乱されることはなく，各部分が，絶え間なく，新たな関連を案出しているように思われた。

四つの石盤があって，二つずつ同じ図柄が描かれていた。一方の盤面には，メラメラ燃え上がるようなアカンサスの葉飾りに縁取られた四辺形の上に，何か木のようなものが認められた。それは，想像上の木で，線の戯れにもかかわらず，相変わらず脅威的な石の表面の空虚さが，ここでは

完全に圧倒されるくらいに，見事に枝分かれしていた。細い花梗が，四辺形を分割し，二匹の直立したライオンが，幹らしきものを見守り，その脇から，十二度，両側に六度ずつ渦巻状に巻いた枝が生えていて，空間を絡めて覆い尽くし，そこからさらに葉が生え，それぞれの枝の輪の真ん中には，鳥が飛び巡っていた。

もう一方の盤面は，真ん中に星形の花を配した，互いに接する輪で縁取られていた。またしても真ん中で，今度は，小さな水盤を支える支柱で区切られた画像には，渦巻模様の左右に，二匹の高貴な鳥，孔雀が認められた。孔雀は首を伸ばしており，線が尾から胸や首にかけて揺れながら走り，背中を越えて，二つとも，くちばしの中に入っていた。鳥たちは，そのくちばしで，水盤から穀粒や真珠をついばんでいた。だが，観察者の精神は，現前するものに拘束されはしない。彼は，それをたやすく変形することができる。線のもつ力だけが持続しているのである。その意味は変化する。鳥は，苦もなく，二つに分かれて水盤から噴き出す噴水に，煙を出す松明に，水差しに，風景に，純粋な抽象の戯れに変化していく。

石盤との出会いは，世界の幸福な放棄に終わった。ここに現前するものは，なお一体何を意味するつもりだったのか？　魂は，素晴らしい釣り合いに固執していた。現前するものも，架空のものも，一切がただよい，決して消えることがなかった。ただ，接触や無遠慮な把捉だけは禁じられていた…。

私は，内陣の柵を越えた。視線は，邪魔されることなく上昇し，きらめく彼方に沈んでいった。金があった。後陣の壁や丸天井は，完全に金で埋め尽くされており，その前に，青い衣装で，手を祝福するように掲げながら昇天する聖母の像があって，足元には，使徒や聖人たちが控えていた。

始まりが支配していた。朝の始まり。年の始まり。時代の始まりが。前方に祭壇があったが，それは，力強く切り整えられた板石に他ならなかった。それは，石の柱で支えられていた。その下に，何のためか分からないが，半ば地面に沈む形で，ローマ時代の石棺が置かれており，その壁面では，活気に満ちた愛の神々が輪舞していた。

その背後に，階段が上昇していた。上方の，後陣の湾曲部は，古代の劇場にみられるような，半円形をなして重なり合う階段と座席で占められていた。その真ん中に，別に，急勾配で階段が上昇し，巨大な王座の前に通じていた。つまるところ，それは，不恰好な石の塊，野外にでも置かれていそうな巨大な石造物に過ぎなかった。この壁で区切られた，明るい空間，上昇する階段の高みには，どれほど多くのものがあるのだろう！座席のくぼみ，低いひじ掛け，背もたれは，この塊の力をほとんど支え切れないでいた。それは，やっとのことで刻み込まれているようにみえた。岩として一体化しながら，全体が，超人的に，しかも簡素に存在していた。

私は，座席に腰を下ろした。かつては，司教がここに座り，半円形の階段に，司祭や助祭が腰掛けていたのだろう。そして，下の石の台の上では，約束の行為が執り行われていたのだ。

しかし，視線は，心ならずも，それを越えてさ迷った。あの台上で行なわれていたことは，肉体や顕現と何の関係もなかった。行為は，空間の至る所で生き続けた。それは，見物の眼を望んではいなかった。（ともかく身廊が長いので，遠方でといったほうがいいようだが）眼には，さらに絵の景観が用意されていた。正面の壁全体を覆うようにして，現実には存在しない黄金の空間の前で，モザイクの地に，最後の審判が描かれていた。仕草や表情だけしか分からない，実体のない人物たちが，出来事を，恐ろしい迫力で示していた。遠くから見ると，さしあたり，荒々しい雑踏，混乱，困惑しか認められず，不安が，暴風のように，被造物の上を荒れ狂っていた。それから，次第に近寄ると，階段の上方，柵の向こうの地面の上では，様々な色の小石で作られた，静止した人物たちを覆うカオスが，二つの領域にはっきり分かれていた。一方には，祝福を受けた者の明るい秩序が，他方には，呪われた者の混乱があった。それらすべての頭上の高みに，威嚇的で，恐ろしくしかも公平なキリストが君臨していた。彼は，最初の人間，アダムの腕を，力強く，荒々しく握りしめ，恭しくひざまずこうとするアダムを，乱暴に引っ張り上げていた。彼の下には，天使が，公正の秤を振りながら漂っていた。一方の皿は，丸々した林檎を載せたように，深く垂れ下がり，もう一方の皿は，ピクピク跳ね上がっていた。炎の嵐が，キリストの足元から発して，彼の左手に流れ，次第に強まり，広がり，呪われた者たちが突き落とされた領域全体を覆い尽くしていた。地獄の深奥には，漆黒，暗闇，夜以外は何もなかった。炎すら，ここでは消えていた。青白い屍，緑の虫が巻き付いたされこうべや四肢だけが，なおも輝いていた。炎に取り巻かれた地獄の，より高次の秩序においてのみ，人間の体は守られるのだ。ここでは，王冠を被った王も，きらびやかな衣装に身をつつんだ，うぬぼれの強い美女たちも，燃えるのである。そして，悪魔や呪われた者たちの群れの真ん中に，他の者から離れて，より大きく，黒い精霊がうずくまり，祝福するように腕を掲げる光輝く幼児を，自分の膝に載せていた。これは一体，何を意味するのだろう？

番人は，答えられなかった。この彫刻の前で再会した友

人たちの中で，美術に非常に詳しい者に，私は尋ねてみた。これは，反キリストなのか？大悪魔なのか？この夜具にくるまれた幼児は，偽の神の子なのか？それを正しく説明できる者は，誰ひとりいなかった。黒い精霊は，恐ろしいというよりも，むしろ素晴らしかった。何かの苦しみが，その表情にあらわれていた。それは，天国や地獄とはおよそ無関係な苦しみだった。この黒い巨人が座っているのが，ここであろうと，聖人たちの上方であろうと，そんなことは全く取るに足らぬことに思われた。悲しげな，大きく見開かれた眼で，彼は，ぼんやり虚空を見つめていた。

－－－－－－－－－－－

教会から出たわれわれは，外で，三人目の連れに出会い，彼に，ジョリンゲルのことを聞いた。

「彼女は，ずっと，向こうの小さな博物館にいるんだ」と，彼は言った。「彼女は，あそこから離れられないんだよ。僕自身も，今し方まであそこにいた。畑の作物みたいに，あらゆるものが幅の広いテーブルの上に乱雑に並べてある。壷や装身具，道具や小さな彫像，立像や建造物の破片が陳列してあるんだ。それらに自由に手を触れることができる。気に入ったものを手に取って，それをじっくり見つめられる。ジョリンゲルは，混乱の中から一番奇麗な品を選び出して，それらを，自分の好みに合わせて，空いた戸棚に区分けするのに熱中しているんだよ。」

われわれも，その小さな博物館を見物したかったが，すでに夕暮れが近づいていたし，出来れば，明るい内に，塔に登って，そこから周囲を一望してみたいと思った。

番人が塔の扉を開けてくれたとき，深い闇がわれわれを迎えた。上に登るとき，階段がうまく見つかるかどうか，われわれは心配していたが，眼がこの闇にいくらか慣れてくると，階段のことは何も心配するには及ばないことが分かった。山道のように緩やかに上昇していく，きちんとした石畳の狭い通路が，われわれを屋上へと導いてくれた。

陽気に通路に歩み入ったわれわれは，まもなく，条光の差し込む，最初の壁の隙間に到達した。上の方からも，光が差しており，われわれは，難なく，正しい道を知ることができた。進むにつれて，われわれが登りながらその周囲を巡っている深淵は，次第にその深さを増していった。そこには，鐘の太い綱が垂れ下がっていた。われわれは，時折，その綱に触れた。それに，上の方から，光とともに，夏に移動する蜜蜂の群れがたてる唸りのような，かすかな，しかし建物の内部で長く反響する音が聞こえてきた。時折，われわれはかがみ込んで，覗き穴から，薄暗くなった水上を眺めた。外は，見る間にその照度を失い，みるみるうちに，穏やかな黄金色を呈してきた。われわれは，先を急ぎ，夕方の光景が妨げなく楽しめるはずの塔の頂上に，出来るだけ早く到達しようとした。

ついに，われわれは，息を切らせることも骨を折ることもなく塔の屋根の下に立った。真ん中に梁があって，そこに鐘が吊ってあった。狭い通路がその回りを巡っており，丸天井を支える柱越しに，われわれは，自由に四方八方を見渡すことができた。

素晴らしい眺望を前にして，いつものように，眼はまず遠方を求めた。地平線の上，太陽がすでにその背後に沈もうとしている黒い雲の壁の前に，ヴェネツィアが，乾いた血のこびりついた古い刃の刀身のような，細長い，刃こぼれした赤褐色の筋になって，横たわっていた。回りの水面の輝きは色褪せ，蒸気船がわれわれをこちらに運んできた昼間の，あの微光や輝きは，もはやどこにもなかった。空には，古い絵にあるような，褐色がかった黄色や緑が広がり，それがやわらかく水面に反映していた。

近くに島々が横たわっていた。水面の向うにブラーノ島が，われわれの眼下に畑や庭のある島が見られた。その中には，まさに形成中の島，様々な発展状態の砂州もあった。水面にかろうじて頭を出しているのもあれば，その汚れのない大地がまだほとんど水に浸されているようなものもあった。わずかに形成された島の縁の間，至る所に，水たまりや湿地があらわれていた。それに，大地から余分な湿り気を抜き取るために，農夫が狭い運河の網を張り巡らせた島も見受けられた。他の島では，艶々した畑が，次第に作物で満たされ，初めは慎重に，そして次第に限りなく盛り上がり，繁茂していた。われわれは，高みからはっきりと，作付けの構図を見ることができた。稲田は，日本画風の細線の陰影を示していたし，アーティチョークの畑は，長い列をなしていた。これらの眺めは，われわれに，食卓の最も繊細な楽しみを想起させた。それから，玉蜀黍畑やアーモンドの木，葡萄畑が，よりはっきり見えていた。

創世記のたとえのように，無から，水の中から生じたこの地方の景観を眺めていると，古い町がこのように完全に消失した理由をわれわれが尋ねたとき，番人が座興に話してくれた物語は，あまり信憑性のないものに思われてきた。それは，水没した町の古い伝説であった。津波が，ある日，トルチェッロを水浸しにし，二つの教会だけがあとに残ったというのだ。

最初，われわれは，この話を信じていた。それは，この話が，二つの教会の不可解な孤立にとても似つかわしく思われたからだ。しかし，今，回りの水がいかに浅いか，水が引いて，空所を陸に委ねることがいかに容易か分かったので，われわれは，湿地帯から熱病が発生して，住民を島

から駆逐したという趣旨の，もう一つの説明を採ることにした。彼らは，より衛生的な島，とりわけヴェネツィアに戻り，どこか他の場所で石を新しい建物のために利用するつもりで，かつての建物を取り壊したのであろう。

われわれのすぐ足下には，この朦朧とした揺れる風景の中で唯一つ確実なものとして，夜がゆっくりおびき出した陰に身を潜めて，二つの教会が横たわっていた。そのサーモンピンクの屋根の上には，まだ明るさが残っていた。同じように，広場もいくらか明るかった。そして，待ち伏せする獣のような陰に取り囲まれて，この夜の包囲の中，いじらしくその白い微光を保っている洗礼盤の上に，引き上げた膝に素手を絡ませた人物がうずくまっていた。その人物は，側面をわれわれに見せていた。彼女は待っていた。彼女の背中はピンと張って，反っており，顔は腕のあいだに隠れていた。

それは，ジョリンゲルだった。われわれは，彼女に呼びかけ，声が彼女に届くように，力を合わせて叫んだ。彼女は，どういうつもりなのだろう？　彼女は，友達を待ちながら腰を下ろしていたが，突然，どこからともなく聞こえてくる声を聞き取った。

彼女は，優雅にほんの少し身を起こした。われわれは，彼女に向かって手を振り，叫ぶのをやめて，ハンカチを振った。彼女がやっとわれわれを認めたとき，われわれは，彼女に，塔の上に登ってくるように呼びかけてみた。彼女は，黙って，手だけでわれわれに合図した。それは軽い手振りだったが，同意するように上の方に伸び上がり，鳩のように，われわれに向かってヒラヒラ飛んできた。それから，彼女は歩き出した。

自分がどんな危険を冒しつつあるのか彼女は知っているのだろうか？　この高みから，彼女が前に歩みを進める様を見ていると，私は，彼女がほほえましい生き物であると感じざるをえなかった。普段はよく発達した彼女の体の釣り合いと均整は，奇妙に歪んで見えた。親密な優雅さを奪い取られて，彼女は，自分が全くその一部と化しているように見える地面の上で，惨めにうごめいていた。上を見るために，彼女が優しい顔をあげたとき，その動作は全く見苦しく感じられた。奇妙に短縮された手足に比べて釣り合いのとれていない大きな人間の顔が，薄明の中で，白く，無格好に，私を見つめていた。

彼女は，きっと，この変身に何も気付いていないのだ。そして，逆に，彼女には，私が塔の上で友達と並んで立ち，ちっぽけな腕を丸天井の支柱のあいだからばたつかせている様が，同じように無格好に見えるに違いなかった。

彼女は，広場を横切って，大胆にも，待ち伏せする陰の中に入っていき，建物のあいだに口を開いている狭い通路の中に消えた。私が想像したよりも長く，彼女は，その中に姿を消したままだった。今こそ彼女が姿を現わすぞと思う度ごとに，私は失望させられた。彼女が不可解なほど長く姿を消していたので，私は，自分のもどかしさを静めるために，よくこっそり行なう，子供っぽい戯れを思いついた。私は数を数え始めた。ジョリンゲルの再登場を示す可能性を，どの数にも与えてやるために，私はごくゆっくり数えた。もちろん，全く公平にというわけにはいかなかった。自分に好ましい印象を与える数字には，かなり長く固執したし，他の数字については，急いですっ飛ばした。「十，十一」と，端折って言ってから，ゆっくり，力を込めて，次の数字「十二」を発音した。私は，なおしばらく，この数字に固執して，以下の数字をまた早口で唱え始めるまで，かなり長い間を置くことを忘れなかった。そんなわけで，私が十三を数える前に，ジョリンゲルが姿を現わしたことは，もはや驚くべきことではなく，むしろきわめて喜ばしかった。彼女の態度に気を配るのを忘れてしまうくらい，私は喜んでいた。自分の直下，彼女の髪の暗い半面のあいだで，一瞬，頭髪の分け目のはっきりした線が光り輝いたのに，気がついただけだった。それから，彼女は，塔の中に姿を消した。

その間に，薄暮が進行し，夜はもはや待ってはいなかった。夜は，今や，急速に西の方に手を伸ばしていた。すでにヴェネツィアは，微光を放つ宝石の帯として，暗い水を，さらに暗い空から分離していた。絶えず，新たな装身具が，黄色や赤のきらめきを放ち，われわれはもはや，自分の周囲の島々の網の目を見分けることができなかった。建築物もまた，無格好な塊に丸まっていた。闇が広場を覆った。われわれのひとりが，パイプに火をつけるためにマッチを擦ったとき，その炎を見て喜んだわれわれは，それで小さな紙切れに火をつけ，それを深淵に投げ込んだ。紙切れは，落下しながら燃え上がった。しかし，地面に届く前に，それは燃え尽きてしまった。

それは，暗い塔の中，われわれには分からないところを登ってくる少女を元気づけるための，心のこもった目印のつもりだった。炎が，壁の穴のそばを落下するのが見えるだろうと期待していたのだが，それは，早々と燃え尽きてしまったのである。

ジョリンゲルが塔の頂上に到着したとき，辺りは，あやめも分かぬ闇夜となっていた。しかし，われわれは，もうすぐ月が昇ることを知っていた。満月なので，われわれはそれを待つことに決した。

－－－－－－－－－－

雨が降っていた。秋雨が降り出すとヴェネツィアほどつまらない所はない。私は，日に何度も，マルコ広場の大鐘楼のたもとの小箱に据え付けてある気象測定器を調べてみた。繊細な，青黒いインキで満たされた小さなガラスの管が，時計のような冷静さで動く円筒の，精密な罫紙の上に，不吉な雨の進展を表わす曲線を描き出していた。その管の神秘的な動きは，天気の回復や悪化を決めることができるように思われた。紙の余白に書き付けられた数字は，一目瞭然だった。その細いガラスの腕が，下降する動きを止めて，鋭い曲線を描きながら，直ちに青線が晴天を示す高さにまで上昇し，総督宮殿の窓の列の上に浮かぶ黒雲が消散して，果実のような色合いの秋の太陽が，海の大気の真珠色のもやで和らげられた輝きを，ついこの間のように，昼下りの喫茶店の客がもつ優雅なカップにもたらす気配はなかった。

雨は，何日も降り続いた。時折，雨音が強まって，激しい奔流が人々を驚かすこともあった。突然の豪雨が人々を襲い，路地を水浸しにした。人々は慌てて，どれであろうと手近な開いている戸口に，不用品を買い取る葉書屋に，汚らわしい飲み物を供するバーに，あるいは，果物屋の店先に駆け込むのだった。

そこで私は，篭に積まれた，赤味を帯びた黄色の柿の実に，久し振りで再会した。矢も楯もたまらず，私は，それを一ポンド買おうとした。だが，果物商が，それを思い止まらせた。それは確かにジャム用にはよいが，まだ生食できるほどには熟していないと，彼は親切にも教えてくれた。よく考えてみれば，彼の言うことは正しかった。私が，テッシン[5]の庭でこの果実を初めて見たのは，霞みのかかった，生暖かいクリスマスの日だった。樹枝に果実を鈴なりにつけた，ほっそりした潅木状の小木で，あの時は，輝かしい重みに耐えかねて，枝が今にも折れそうになっていた。太陽は，霧に遮られて，柿の実よりもくすんだ輝きしか示していなかった。私は，果実が大地に落下する音，不意に静かな庭に落ちる音を，繰り返し聞いた。実ははじけ割れ，舌の上でとろける，甘い，傷みやすい果肉が無駄にされた…親切な果物商は，試食用に，柿の実を一個差し出した。それは，まだ固く，ニガヨモギのように苦かったが，私は，過ぎ去った日々を思い出しながら，それを喜んで食べたのだった。

人々が賞賛し，旅行者たちが話のついでに必ず言及する，ヴェネツィアの魅力は，この絶え間のない雨によって徹底的に破壊された。ヴェネツィアを構成する人間とそれに付随するすべてのもの，家々，宮殿，教会，彫刻，絵画は，潟に特有の光がなければ，突然，生気を失い，影のつまらぬ世界と化した。旅に出てしまうのが最良の策だった。しかし，天気表から，私が手持ちの金で行けるところはどこでも雨だということが分かっていた。だから，私はここに滞在し，ホテルの部屋で，ベッドの上に体を伸ばして休み，天井や壁の湿気の染みが次第に大きくなっていく様子，その地図のような形の染みが時とともにたどる変化を観察していた。私は，アラビアやスコットランドを発見し，好ましい乾燥した暑さの中，ハンモックに横たわり，エジンバラの霧の中を散策し，セイロンやスペインのことを夢想し，そうした偽りの暇つぶしにうんざりすると，起き上がり，雨の中をあてどなく，あちこちぶらつくのだった。

訳注

1) イタリア北東部ヴェネツィア本島の北東に位置する島。大小の運河で7つの島に別れているが橋によって繋がっている。ヴェネツィア・ガラスの生産は世界的に有名である。
2) イタリア北東部ヴェネツィアの潟にある島。レース編みの生産と色とりどりに塗られた独特の家々が特徴である。
3) イタリア北東部ヴェネツィアの潟にある島。この地域でもっとも古く人が定住した。639年創建のサンタ・マリア・アスンタ聖堂は三廊式で，独立した方形の鐘塔が内陣の背後に立つ。司教座および説教壇の一部は9世紀，孔雀や獅子をあしらった生命樹の浮彫で飾られた内陣の障壁は11世紀のものといわれ，，西壁にはモザイクで最後の審判が描かれている。西南に隣接して，ビザンティン様式の六角堂，サンタ・フォスカ教会（11世紀）がある。
4) 建築の平面形式のひとつで，中央の身廊の2辺ないしはそれ以上の辺を，側廊によって取り囲むものをいう。身廊と側廊は列柱によって分けられる。
5) スイスの最南に位置する州。イタリア語地域。風光明媚な土地で，ブドウ栽培や酪農業が盛んである。